福井の文化をきり拓く
ふっか～と
2006 秋
Vol.25

特集―福井芸術・文化フォーラム、5周年。

誌面が新しくなりました
「ふっか～と」はこれまで季刊文化情報誌として発行してまいりましたが、誌面のリニューアルにともない、公演情報などは別刷で発行、本誌は事業の評価や今後の方向性を探る文化誌としての役割を充実させて発行することとなりました。年2回の発行となりますが、新しい「ふっか～と」を今後ともよろしくお願いします。

福井芸術・文化フォーラムのあゆみ

福井市文化会館、福井市民福祉会館を主な会場にこのような事業を行ってきました（2006年3月までの主な事業です）

●自主事業　鑑賞する―魅力あふれる舞台芸術との出会い
●地域創造事業　創る―――地域の人たちとの作品づくり
　体験する―子どもから大人までの文化体験や講座
●共催事業　応援する―市民の企画に会場費を助成
●委託事業　育む―――福井市の委託を受けて行っています
●広報事業　知らせる―情報誌『ふっか～と』の編集・発行、ウェブサイト
●サロン　出会う――人と人、人と文化に触れる場所

1999（平成11年度）
7月「福井市文化会館利用者懇談会」を母体に
　準備会を設立

2000（平成12年度）
4月 事業開始
●自主事業
・劇団青年座『フユヒコ』
・劇団民藝『かの子かんのん』
・前進座『おれの足音』
●地域創造事業
公演とワークショップ
・『日本の音・舞・謡～流派をこえて～』
・『若い芽のコンサート』

2001（平成13年度）
9月 NPO法人の認証を受ける
認証記念　松元ヒロ　ソロライブ
●自主事業
・『竹竹』コンサート
・劇団民藝『アンネの日記』
・地人会『昨日までのベッド』
・ミュージカル『葉っぱのフレディ』
●地域創造事業
公演・『第2回日本の民謡～うたとおどり～』
　・『若い芽のコンサート2001』
ワークショップ・講座・小学生のための夏休みホール探検
　・高校生のための舞台技術講座
　・演劇ワークショップ

2002（平成14年度）
●自主事業
・伊藤多喜雄コンサートTAKIO SPIRIT2002
・JIS企画『今宵かぎりは…』
・『芸文いこさ寄席』『出前寄席』
・綾戸智絵LIVE2003
●地域創造事業
公演・『第3回日本の民謡～うたとおどり～』
ワークショップ・講座・『若い芽の育成プログラム』
　・小学生のためのホール探検
　・高校生のための舞台技術講座
　・ダンスワークショップ
アウトリーチ・Arts in Education～日本の音～

2003（平成15年度）
●自主事業
・舞台『海の上のピアニスト』
・二兎社『萩家の三姉妹』
・『第2回芸文いこさ寄席』『出前寄席』
・東京スカパラダイスオーケストラLIVE TOUR 2004
●地域創造事業
公演・『第4回日本の民謡～うたとおどり～』
　・『地場産コンサート』
ワークショップ・講座・夏休み子どもプログラム
　・邦楽専門家のための講習会
　・音楽教員のための和楽器講習会
　・ダンスワークショップ
アウトリーチ・Arts in Education～日本の音～

2004（平成16年度）
●自主事業
・綾戸智絵tour2004
・宝くじ文化公演『月猫えほん音楽会』
・『第3回芸文いこさ寄席』『出前寄席』
・公共ホール音楽活性化事業
　『ふくい春待ちコンサート』と地域交流プログラム
●地域創造事業
公演・『第5回日本の民謡～うたとおどり～』
　・『みんなでうたおう！童謡ライブ』
ワークショップ・講座・夏休みこどもアートパーク
　・ダンスワークショップ
アウトリーチ・Arts in Education～日本の音～

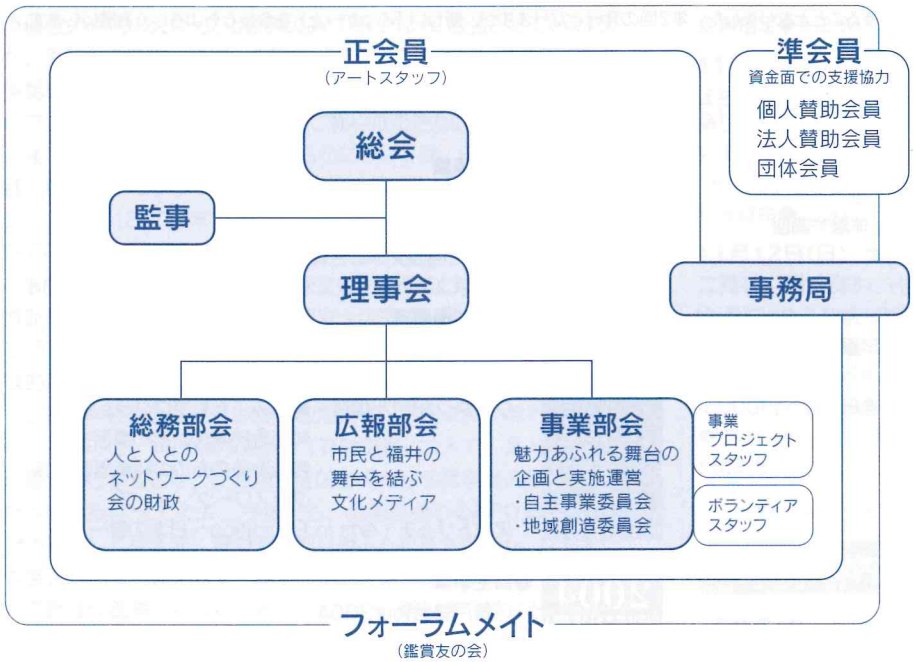
2005（平成17年度）
●自主事業
・ウルフルズ　ULFULS 05 TOUR SURVIVE！
・オペラ『魔笛』プレ・セミナー「ウィーン流オペラの楽しみ方」
・ウィーンの森バーデン市立劇場　オペラ『魔笛』
・『第4回芸文いこさ寄席』『出前寄席』
・舞台『ウェストサイドワルツ』
●地域創造事業
公演・『第6回日本の民謡～うたとおどり～』
　・『踊りに行くぜ!! vol.6』
　・『めだかの学校～みんなでうたおう！童謡ライブ2』
ワークショップ・講座・夏休みこどもアートパーク
　・『みんなで舞台にたとう！』
　・和楽器指導者養成講習会・講演会
　・ダンスワークショップ
アウトリーチ・Arts in Education～日本の音～

◎共催事業
市民の企画59事業に対して会場費を助成
◎委託事業
小学校鑑賞教室、幼児演劇鑑賞教室、中学校狂言・能楽教室
◎サロン
歴史探索サロン、『ブラスト！』鑑賞バスツアー　など

特集―福井芸術・文化フォーラム、5周年。

福井芸術・文化フォーラムが発足し、NPO法人の認証を受けてから今年で5周年を迎える。
福井市文化会館―公立文化施設―の運営を、行政ではなく、市民の力で。
その立ち上げは当時としては画期的な出来事で、その後の活動は全国から注目を集めてきた。
わたしたちはどんな道を歩んできたのか、そしてどこへ向かおうとしているのか。
事業開始からこれまでの5年余りを振り返りながら、福井芸術・文化フォーラムの今後の展望とともに、新しい時代の地域文化と公立文化施設のあり方の可能性を探る。

福井芸術・文化フォーラムは次のような組織で運営されている



NPOとは?

NPOは"Non-profit Organization"(非営利組織)の略です。1998年に成立した「特定非営利活動促進法(NPO法)」で規定される福祉、教育、まちづくり、文化、芸術など特定の17分野について、市民が主体的・継続的に活動する組織をいいます。この組織に法人格が与えられたものがNPO法人です。これは誤解されやすいところですが、非営利とは、「無償」で事業活動を行うことではありません。利益を会員や出資者に還元・配当しないで、活動の資金に充てることを意味しています。
これまで、営利を目的としない団体が法人格を持つ場合には、公益法人になるのが一般的でしたが、設立要件が厳しいため、多くの団体は任意団体のままであったり、特に営利を目的としないにもかかわらず株式会社や有限会社になったりしてきました。そこで、営利を目的としないことをはっきりさせ、しかも官公庁による制約をできるだけ排除した自由度の高い非営利法人制度の必要性が、1990年ごろから訴えられるようになりました。さらに1995年の「阪神・淡路大震災」でその議論に拍車がかかり、1998年に同法が成立しました。

これまでの事業のあゆみについては、表紙を参照されたい

市民企画運営団体の未来

名古屋大学大学院環境学研究科教授　**清水裕之**

公立文化ホールに関わる指定管理者制度が動き出している。これは行政改革の一環として進められたもので、行政が設置する「公の施設」について民間の活力を利用して運営の効率化を図ろうとする動きである。

昨今の民営化論、小さい政府づくりなどと呼応して、何となく響きが良い。この記念号をよまれている多くの方も、それはいいことだとおっしゃる方も多いだろう。事実、体育館などについては民間の類似スポーツ施設関連の企業の参入により、サービスがよくなったと喜んでおられるところも多いと聞く。

確かに、公立文化ホールについても行政による運営には疑問符のつくものが多い。この福井芸術・文化フォーラムについても、その成立の経緯は福井市文化会館の見直しが俎上に上ったとき、市民の力で新しい文化会館の運営を切り開いてゆこうという趣旨でスタートしたものであった。当時としては画期的な出来事で、全国から注目を集めた。今まで受け身であった文化会館の運営が、単なる鑑賞事業の実施ばかりではなく、市民の持っている多様なネットワークを活用して、地域の文化団体との連携、学校との連携など様々な広がりをもつ活動を展開してきたことは、おそらく福井市民の方々の認知以上に全国の専門家の間で高く評価されている。福井芸術・文化フォーラムは確かに、公立文化施設の運営に大きな風穴をあけた。

しかし、全国の公立文化ホールの活動がこの間に大きく変わったかというとそうではない。むしろ、全体的な行財政改革の中で行政における文化ホール運営に対する重要度は下がり続け、事業の縮小、人員の圧縮、必要な改修の滞りなど、懸案事項は多くなったという印象である。こうした中での指定管理者制度の導入は、民営化による活性化よりは、行政における文化政策の切り捨て、先送りに繋がる危険性のほうが大きいのではないかという危機感がある。

文化ホールは地域にとって本当に必要がないだろうか。地域が地域として誇りと特色をもって生き続けてゆくためには、その地域独特の文化のありようは非常に大切である。文化ホールはその地域の市民文化の大きな一翼を担ってきたのではなかったか。最初に演劇やダンスを見たり、音楽の演奏を聴いたのは公立文化施設であったと答える人たちは多いと思われる。実際、舞台芸術に携わる人たちでも、子どもの頃にこれらの施設で始めて舞台芸術

に触れたとおっしゃる方が多い。文化ホールは空気のような存在になっているが、なくなってみるとその大切さに改めて気づかされるであろう。

公立文化施設はいま、その存亡の危機にさらされている。そして、その先行きを大きく左右するのが指定管理者制度なのである。福井芸術・文化フォーラムも指定管理者にむけて動き出しているとお聞きする。これからは、今までのような先駆例ではなくなる。むしろ、多くの良い事例、悪い事例の中で、その存在を勝抜いてゆかなければならない時代に入った。短期的には、多くのホールでは民間参入による経費削減が目標とされている。そして、市民の目もそこに注がれるであろう。しかし、それが最終目標になっては、その地域の文化活動は、気がついたときには壊滅的な打撃を受けているのではないか。厳しい時代であるが、高い目標を持ち続けて、新しい時代に向けて邁進していただきたい。

清水裕之●しみず ひろゆき
名古屋大学大学院環境学研究科教授。工学博士。
新国立劇場、東京芸術劇場、彩の国さいたま芸術劇場、世田谷パブリックシアター、愛知県芸術劇場など多数の公立文化施設計画に参画。我が国で最初の舞台芸術関連の総合的な国際会議「世界劇場会議'93」を提案し事務局代表を務める。市民参加型の公立文化施設計画も多数コーディネート。『劇場の構図』（鹿島出版会）、『21世紀の地域劇場』（鹿島出版会）など著書多数。

銘板との対話

福井芸術・文化フォーラム　理事長　**樟本立美**

福井市文化会館のエントランスホールの正面左側壁面に、金文字に浮かび上がった一枚の銘板がはめ込まれてある。そこに立って、見つめていると、そこには、

この会館を
市民みずからのものとして活用し、
互いに親しみ、たすけあい
より高く、より豊かな
文化のまちをつくりましょう
たび重なる災禍に屈せず、不死鳥の
復興をなしとげた福井市が、さらに
清新な文化都市として飛躍的発展を
期するため、関係当局ならびに諸団体
などの絶大なる支援を受け、総工費
五億円を投じ、昭和四十一年十二月着工
同四十三年四月に完成した
ときあたかも明治百年、福井市制八十年、震災二十周年、
第二十三回国民体育大会開催にあたりこれを記念して建設した。
昭和四十三年五月
福井市長　島田博道

「昭和43年4月に生まれ、今年は38歳となった。巷では平均寿命は50年余りだと聞く。壮年期もそろそろ終りに近づき、やがて老年期に入りつつあるのだと思う。世継ぎの問題もしっかりせにゃならん、不都合な部分も出てきたが、これからも全力で頑張るぞ」との声が聞こえるような気がする。それにしても、ここに掲げられている理念とか、目的とか、想いというものが、今なお、私にとっては、実に新鮮で、力強く、気高く感じられ、いつも感銘を受けている。

会館には、大きく二つの役割がある。一つは、市民が自由に舞台芸術を創作したり、発表したりする場として、常に使いやすく、気持ちよい環境を整えておくこと、二つ目は、市民のために演劇や音楽など舞台芸術の鑑賞の機会や、学習の機会を用意することである。開館以来、前者は福井市が直接、後者は、市が主導して「福井市文芸協会」が組織され、その任に当たって来たが、いずれも、行政中心の、管理、運営であった。数年来の時代の変革や行政のあり方の議論に加え、「市民のため」「市民にとって」といった目的が、しっかり確保されてきたか、今後も確保できるか、真剣な検討が進められた。その結果、福井市文芸協会に代わり、市民が、自らの責任で運営・実施することとなり、組織づくりが進められた。私たちの産声である。

NPO法人認証を受けて、今年は、5周年に当たる。地道な努力の積み重ねによって、今日では、「鑑賞する」に加え、「創る」、「体験する」、「応援する」など、いろいろな形を通しての舞台芸術活動の広がりや、それに関わる市民の輪は、交代時の文芸協会とは比べようもない。しかし、いつも悩まされ、苦しむのは、財源の問題である。私たちにとって、宿命なのかもしれない。きっと、これからも、このこととは、長く付き合っていかなければならないのだろうと思う。事業を黒字にしたい、黒字の事業は大事にしたい、と思いつつ、半面、この事業が本当に市民のためになったのだろうか、なっているのだろうかと自問自答する。いや、そんな奇麗事だけではいかないとの思いもそこを通り過ぎようとする。貧すれば鈍するではないが、ともすれば、目指すべき方向を見失いかねない。願わくは、舞台の上のことから、会議やチラシ一枚にいたるまで、絶えず、この会館が培ってきた伝統と品格を保ちつつ、より厳格な公共性、より高い文化性・芸術性をこよなく追い求めていきたいものである。

今後は、文化政策の調査・研究を進め、政策提言をしながら、政策に裏づけされた事業展開を図ることと、鑑賞する人の輪を広げ、事業収支の安定化を図ることも大切なことだと考えている。いずれにしても、私たち一人ひとりにとっては、決して背伸びすることなく、可能なことを、その範囲内でしっかり実践することが大切だと思う。

苦しさ、辛さを超えて、私たちが味わう感動、歓び、楽しさ、うれしさ、面白さを一人でも多くの市民に伝え、参画を促したい。そのためにも、日頃の活動が、私たちにとって、楽しく面白いものであり続けなければならないと思っている。

樟本立美●くすもと りゅうび
福井芸術・文化フォーラム理事長。
1969年～2003年、福井市役所勤務。遺跡の調査、朝倉氏遺跡や養浩館庭園の保存・整備、おさごえ民家園の移築・復元、歴史博物館建設等に従事した。その間、文化課長、教育次長、教育部長を歴任。

自主事業5年の軌跡～そして明日へ

福井芸術・文化フォーラム 事業部会　自主事業委員会　**斉藤厚一**

『フユヒコ』（2000）

第1回芸文いこさ寄席（2002）

綾戸智絵LIVE2003（2003）

オペラ『魔笛』（2005）

『ウェストサイドワルツ』（2005）

福井芸術・文化フォーラムの看板でもある自主事業活動のスタートは、自分の知らない未経験で新しい文化・芸術をスタッフやお客様と共有できる喜びでいっぱいだった。しかし、一方では文化芸術・趣味にお金を掛けないと言われる福井県民へ如何に喜んで頂けるプレゼンテーションができるかと言う不安との板ばさみでもあった。

永い間福井市民に芸術文化を提供してきた「福井市文芸協会」が歩んできた行政主導にかわる市民参加（主体）型の「福井芸術・文化フォーラム」の誕生は注目を浴びていたが、「市民が見たいもの、やりたいものを市民レベルで考えていく」ことが如何に難しいものであるかを体験しながらのスタートだった。

第1回自主事業委員会は1999（平成11）年8月2日に開催。舞台（芝居）2～3本と音楽1公演で事業を開催することを確認し、芝居・音楽を組み合わせながら、クラシックは「ハーモニーホールふくい」に当分は任せて、独自の特徴のある音楽会を模索することを確認してスタートした。「将来的には創作ミュージカル等も」と、夢は大きく羽ばたきながらも、実際は暗中模索、「頭をひねり、身体を動かし、お金も出す（自分で見るチケットを買う）」のが福井芸術・文化フォーラム会員のモットーと活動を始めた。

記念すべき福井芸術・文化フォーラム設立記念第1回自主公演は2000（平成12）年5月22日、青年座制作による『フユヒコ』と決定した。これは、初代事務局長で当時県演劇連盟事務局長でもあった故・竹内成鴻さんの勧めもあった。2本目は劇団民芸の『かの子かんのん』一樫山文枝、伊藤孝雄と民芸の二枚看板が売り。3本目の芝居は京都南座で1ヶ月公演の入場券が完売している忠臣蔵をアレンジした『おれの足音』、南座に福井から大勢で下見観劇をし、「これはいける」と見たてた自信の作品である。当時NHK大河ドラマで主演をしていた中村梅之助、祥之助、河原崎國太郎と、前進座の看板俳優で前進座特別公演と鳴り物いり、此れは売れるよ！と力も入った。

はたして、民芸公演は福井民芸の会の団体扱いもありまずまずの入りだったが、『フユヒコ』と『おれの足音』は見事にはずれた。都会で大好評になり、良いと折り紙つきの芝居も福井ではそうは行かないことを痛感した、ほろ苦いスタートの事業となった。

2002（平成14）年度公演では独自性を出し、若者にも受けると思い選択した実力派民謡歌手「伊藤多喜雄」もやや寂しい客席だった。スタートではつまずいたが前向きな自主事業委員会のメンバーはますます意気盛んになり意欲を燃やしていった。

2003（平成15）年度からは「東京スカパラダイスオーケストラ」、「綾戸智絵」、「ウルフルズ」の公演でチケット完売、立ち見席追加という快挙の事業を経験し、会場全員がスタンディングという始めての経験をしたときは、熱演のステージより会場を埋めつくしたお客様にしばし感動して見とれてしまった。

2005（平成17）年度は大女優若尾文子と浅野温子等の『ウェスサイドワルツ』、「ウルフルズ」、「いこさ寄席」、念願であったオペラ公演『魔笛』、の4本のうち2本の事業が補助金なしの黒字決算を記録、福井県民にも福井芸術・文化フォーラムの自主事業が少しずつではあるが認知されてきたのではないかと思われる。芝居公演では度々共催を受けてくれた「ステージふくい」の皆さんの協力も大きい。これからも明日に向かってますます魅力あるステージを提供していきたい。どうぞご期待下さい。

斉藤厚一●さいとう こういち
福井芸術・文化フォーラム常務理事。
福井県合唱連盟理事、事務局長を歴任。混声合唱団福井コールアカデミー団長。
“2007年団塊の世代リタイア” を見越し、2006年1月、60歳以上限定のシニア「男声合唱団ゴールデンエイジふくい」を友人と立ち上げ、団長を務める。同団はメディアの注目を浴びて発足時14名のメンバーが2週間で60名をオーバし県内最大の合唱団である。

ここちよい疲れの向こうへ～地域創造事業雑感～

福井芸術・文化フォーラム　事業部長　**岸田美枝子**

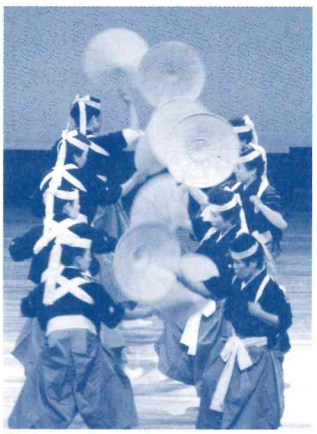
福井芸術・文化フォーラムが「市民参画による文化芸術のまちづくり」をミッションに市民の事業体として活動を始めた時、「福井市文芸協会」時代との事業内容の違いが際だっていたのは地域創造事業の登場だろう。地域には自然や歴史、伝承芸能や食文化、民俗行事などが生活の中で受け継がれており、音楽や演劇、ダンスなどを通して自らを表現する人もいて、そこには当然ながら人の存在がある。人が出会えば相手のことを知りたくなり自分を語りたくなる欲求、すなわちコミュニケーションの中で人と素材が浮き上がり、つながり、地域創造事業として形作られていく。そのプロセスが面白い。面白いけど大変、だけどオモシロイの繰り返し…

今、「NPO法人福井芸術・文化フォーラムごあんない」のパンフレットを開き、地域創造委員会が担当する「創る」「体験する」事業を眺めると何とも言えない複雑な感慨がある。委員会には芸術監督もプロデューサーもディレクターも存在しない。いわば全くの素人集団でありマニュアルも前例もない。事業の始まりは、委員のかかわりの深い分野や興味関心、ある時はひらめきだけの思いつきなんてことから発案されるアイデアが発端だ。「やってみたい！」気分に“快”を伴ってことが進む。それをしなやかに感じながら新しい発想でその時その時に応じて考えていくしかない。新規事業の立ち上げには熱が入り期待感もあるが、継続ともなればマンネリとの戦いを余儀なくされ、事業打ち切りにはそれなりの痛みも伴い、試行錯誤の中から見直しや工夫を重ねている実情がある。

今では地域創造事業のほとんどが、出演者と委員会でプロジェクトをつくって事業が準備されていく。フォーラム発足とともに歩んできた「日本の民謡～うたとおどり～」がプロジェクト方式の先駆けとなったのだが、委員会が素人であったがゆえの当事者だのみが効を奏した感がある。頭で分かったような気になるのではなく、みんなでじっくり探り合う中から何かを掘り当てた感覚を共有する瞬間が確かにある。そして事業はより多くの智恵と力が集まって進化する。

数年が経った地域創造事業を思うに、個人の表現として芸術的価値を追求することだった舞台芸術のあり方に加え、他者とのコミュニケーションや対話の中から生まれる舞台芸術への可能性を感じている。社会への参画の仕方は多様に存在するが、アートへの参加もそのひとつ。いつもとはちょっと違う楽しい出会い方が、アートに似合いの市民参加の有り様だと思う。観客として、表現者として、そして企画運営への参加者として、フォーラムはすべての市民に開かれたプラットフォームでありたい。

それにしても、いずれの事業もゼロから出発して、GOサインに踏み切る最後の一線は「賭」のような気分が今もぬぐえないのである。



「日本の民謡～うたとおどり～」

「日本の民謡～うたとおどり～」

ダンスワークショップ

観客席の様子「みんなでうたおう！童謡ライブ2」

音響操作卓に触れてみる「夏休みこどもアートパーク」

岸田美枝子●きしだ みえこ
福井芸術・文化フォーラム副理事長・事業部長。
夫の転勤で福井市に住民届を出して、はや四半世紀。10年前に「母卒業」「嫁廃業」「主婦休業」の三業宣言をして市民活動三昧の日々を過ごす。子ども・文化・NPOをつなぐことを誰かがやらなければならないのなら、その誰かのひとりでありたい。福井県子どもNPOセンター理事長

Arts in Education ～日本の音～

福井芸術・文化フォーラムの特徴的な事業のひとつに挙げられるこの事業。小中学校に和楽器専門家を派遣するアウトリーチプログラムである。事業の継続のなかで見えてくるものは何か。現場で指導する派遣講師の声をきく。

地域の人材を活かして、日本の伝統音楽を子どもたちに（後世に）伝えることを目的として、福井市教育委員会と連携しながら、2002年度より実施している。
伝統音楽を継承していきたいという邦楽専門家の強い思いと、教育現場に専門家を派遣するアウトリーチ活動を進めていきたいという福井芸術・文化フォーラムの思いが一致し、事業が進められることとなった。
中学校学習指導要領の改訂により「3年間で1種類以上の和楽器を体験すること」が義務づけられたこともあり、現場からの要望も強く、現在までに、福井市内の24小中学校に、のべ55名の講師を派遣。児童・生徒約1,400名が「日本の音」を体験してきた。
実施している学校では専門家と現場の教師によるより良い授業づくりが展開されつつあるが、一方、派遣希望校の固定化など、新たな問題が浮かび上がっている。

授業の様子

福井芸術・文化フォーラムと学校教育

水井推山

福井芸術・文化フォーラム5周年おめでとう御座います。

私は、設立時より一般会員として参加させていただいておりましたが、平成14年より、Arts in Education事業が始まり、邦楽派遣講師（尺八担当）として、小中学校で指導させていただいております。最初は、子どもに邦楽を指導するにはどのようにしてよいか分からず、幾つかの方法を試みました。その結果、先ず邦楽の生演奏を聴いてもらい、その演奏曲のなかに子どもが知っている曲も入れて興味を持たせ、邦楽器の素晴らしさ楽しさを知ってもらい、それから邦楽と洋楽の違いを教えるといった指導方法が良いということが分かりました。現在その指導方法を取り入れており、音楽の先生にも好評です。それと、もう一つ気づいた事は、演奏を聴かせる人と教える人は、別であっても良いということです。

今のところ学校側は、ほとんど私たち（派遣講師）任せの授業になっておりますが、これからも、この事業を継続していくには、学校側にも邦楽の勉強をしていただき、演奏は出来なくても、指導できるところはしていただき、出来ないところを派遣講師がゲストティーチャーとして担当する、といった形がよいと思います。

「日本の伝統文化に携わっているものは、それを、後世に伝える義務がある」と私は思います。

これからもこのような事業に協力していきたいと思っております。

授業の様子（中央が永井さん）

水井推山●みずい すいざん
尺八奏者。1996年、都山流尺八の最高位「竹淋軒」を冠称される。2001年、中国浙江省杭州市にて日中友好音楽会に出演するなど、国内のみならず海外での演奏活動も行う。2006年、福井県文化協議会「文化芸術賞」受賞。

日本の音を子ども達に

石川麻紀

私は、和楽器の中の箏と三絃（三味線）を担当しています。いままでに、中学校で三絃や箏の体験と発表会のお手伝いをしてきました。曲は「さくら」や「おぼろ月夜」「ふるさと」…など。

一般的に、はじめての和楽器は“難しい”というイメージがあるようですが、子ども達は音・音楽として受け入れてくれて「さくら」の旋律程度なら1時間あればマスターできてしまいます!!

小・中学校の和楽器導入や福井芸術・文化フォーラムの活動のおかげで、箏や三絃を“見たことがある”“さわったことがある”子供達が、私が学生だった頃よりははるかに多くなってきていると感じます。

学校側に負担なく和楽器を体験できる福井芸術・文化フォーラムの素晴らしい活動を1校でも多くの学校に知ってもらい、たくさんの子供達に日本の音を伝えていきたいと思っています。

和楽器の体験（中央が石川さん）

石川麻紀●いしかわ まき
アララギ楽苑・玄箏社　師範（箏・三絃）。2003年、福井県文化協議会「新人賞」受賞。
2005年5月にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団メンバー、ウィーン・ゾリステン・トリオと共演。

市民の目

表現する人、企画する人、鑑賞する人。――市民の事業体としての福井芸術・文化フォーラムの魅力は、市民による様々な参加の仕方が可能ということにあるといえるだろう。しかも、その「役割」は固定されたものではなく、あらゆる市民が有機的に交わっていく可能性を秘めている。福井のまちに暮らす人の、芸術文化に期待する声をきいてみた。

今年は福井「文化芸術のまち」元年

小田こんぶ **小田眞弘**

日ごろあくせく働く商業者の私には、芸術や文化というようなものは縁遠い存在です。絵画や彫刻を鑑賞しに美術館に足を運ぶのも、能や演劇を見に劇場に向かうのも、少し気を張った格好をして「お出かけ」をしなければなりません。子供の頃、妹がバレエをしていたことがあり、その発表会を見に家から程近い文化会館に行った時でさえ、親に「よそ行き」の格好をしてもらい、ひどくかしこまって緊張しながら座っていたように思います。

文化が極まって芸術になると考えれば、私が携わる食の文化にも家庭料理・田舎料理といった庶民の文化があって、一方で料亭の会席料理や宮中料理のような芸術的なものがあります。

大事なのは、文化を感じながら極まった芸術に触れてみたくなること。「よそ行きでお出かけ」しなくても「普段着で寄ってみる」感覚が必要だと思います。

今回の「まちは劇場」の3日間、私を含めて、ふだんなかなか文化芸術に触れられない人達にとって、大変良い機会をいただけるのだと感じています。三味線があり、パントマイムがあり、芝居が観られる。それも、格好を気にせず町中をぶらりと歩きながら、ちょっと立ち寄って楽しめる。これをきっかけに自分も始めてみる、あるいはもっと極まったものを求めてみる人達が増えれば良いと思います。そしてできれば周年事業で今年だけのものでなく、毎年秋の恒例の催しとして今年が元年になればと期待しています。福井が「文化芸術のまち」となることを思い、これからも皆さんの応援をさせていただきたいと思っています。

小田眞弘●おだ まさひろ
呉服町通りにて創業大正7年の昆布海産物商「小田こんぶ」を3代目として経営。呉服町商店街専務理事。これまでに、(社) 福井青年会議所や「誇りの国ふくい」デザインコミュニティに所属し「ふくい宝さがし」運動に関わるなど、商店街とまちづくりへの思いは熱い。

福井芸術・文化フォーラム5周年記念事業

「まちは劇場」開催にあたって

福井芸術・文化フォーラム

2006年9月29日～10月1日

福井市文化会館の近隣地域である福井市中心市街地エリアの店舗、空き店舗、工場跡など、さまざまな地域資源5ヶ所にその日限りの舞台空間を設営し、演劇、ダンス、パントマイム、講談など10演目に及ぶ多様なジャンルの舞台芸術作品を上演します。

なぜ街に出るのか？

劇場に足を運ぶということに対して敷居が高いと感じている人は少なくないのではないでしょうか。ロックやポップスのコンサートならまだしも、演劇やダンス、伝統芸能となると、興味はあっても、なかなかその第一歩を踏み出せない人も多いと思います。今回の企画「まちは劇場」では、既存の文化施設に留まらず街なかのいたるところで上演を行うことで、若者からお年寄りまで多くの方たちがより気軽に鑑賞できる機会を提供し、今後、より多くの人たちが劇場に足を運ぶためのきっかけにしたいと考えています。

市民による手づくりのフェスティバル

舞台芸術公演の企画・運営や舞台技術の担い手を育んでいくことも、今回の「まちは劇場」のもうひとつの目的です。

「まちは劇場」の運営は、一般市民や商店街の店主らで構成される「舞台アートスタッフ」(ボランティア) が担当します。舞台アートスタッフは、事前に約1ヶ月間に渡って「舞台アートスタッフ養成講座」を受講。公演予定会場に実際に舞台を設営していく過程を体験するなどしながら、「現場」でノウハウを身につけて、本番に備えます。

そもそも、まちは劇場である。

「劇場」とは、どんな場所でしょうか。

――さまざまな作品を鑑賞する場所。創造し、自らが舞台に立って表現する場所。あるいは、そのような活動のなかで、人と人とが出会ったり、自分自身を見つめ直したりする場所であるということができるかもしれません。このように考えると、わたしたちが暮らすこの街もまた、劇場のようであるといえるのではないでしょうか。

「まち」は、本来「劇場」である。

――わたしたちは、この企画をとおして、あらためて街の持つ機能を見直すとともに、これからも、ふくいの街を舞台に、文化のちからでまちづくりをすすめていきたいと考えています。

リ・レ・ー・ト・ー・ク

ピアノは呼んでいる

―地下に眠るスタインウェイピアノ―

仁愛女子短期大学名誉教授 **寺尾敏幸**

福井市文化会館が昭和43年に開館後、福井県立音楽堂ができるまでの28年間に世界に冠たる数多くのピアニストがこの会館を訪れてスタインウェイピアノを演奏した。10年以上前の来館資料は廃棄され調べようがなかったが私の記憶ではイングリット・ヘブラー、D・ヨッフェ、A・ワイセンベルク、T・シェバノワ、L・ゲルバーなどが思い浮かぶ。

ウィーン生まれでモーツァルト演奏の大家であるヘブラーは3回ほど来館しており毎回聴くのを楽しみとしていた。最初は昭和46年頃で、授業を終えて開演間際に駆けこんだのを覚えている。もう2階正面も1階両サイドの扉も閉められており、4階まで全力で駆け上がりホールへ入ったと同時にヘブラーがステージに入ってきた。そしてハイドンの名品、幻想曲ヘ短調を静かに弾き始めた。その気品と優しさに満ちた美しさは筆舌に尽くしがたく今でも頭に響いている。またアンコールに弾いたシューベルトのソナタ第18番ト長調の第3楽章のロ短調のメヌエットは絶品で今も胸に甦り、清らかな哀感と清浄な魂の舞踏が、疲れた心を芯から癒してくれる。ヘブラーは今年6月来日の予定であったが急病のため日本での演奏会は全て消えてしまった。またヘブラーを繰返し招聘して下さった武曽豊治元館長は既に故人になってしまっている。

ヘブラーが弾いたスタインウェイピアノは今も地下の楽器収納所にある。1960年代に製造された製品は材質も優れ本当に温かい音色をもっている。優れた調律師によって再生は可能である。心の通うピアノを生かせる日の来ることを願っている。

●福井市文化会館にまつわるエピソードをテーマに、書き手の紹介でつながります。誰のどんな話が登場するか、次号もお楽しみに。

広報部会員として心掛けてきたこと

山下 博

1999（平成11）年7月発足の準備会から任意団体を経て、NPO法人化の5年間を通して、広報を担当してきた。とりわけ、団体運営の基本である「機関誌」の充実と、調査研究機能に連なる国内外の類似団体情報の収集・分析及び発信を心掛けてきた。

前者では、ネーミング者でもある『ふっか～と』が四季刊での24号を経て、このリニューアル号に継承されることになる。読者反響としての丁重な事務局宛てお便りをいただけた「舞台・演劇用語シリーズ」、改めて個別芸術文化団体運営の苦悩と喜びを聞かせていただいた「ひろしのおじゃま虫」シリーズをはじめ、各コーナーの取材、執筆依頼などを通じても、地方の時代、NPO・NGOの時代、経済優位の時代の芸術・文化振興のあり方について勉強させていただいた。それら所見の一端は、各号の「編集後記」に記してきた。なお、本誌のバックナンバーは福井県立図書館の郷土・環日本海コーナーにファイル配置してあるのでぜひご覧いただきたい。

後者の内、図書による本会の紹介については、田中尚輝氏著『実践！NPOマネジメント』（2002年）や清水裕之氏著『アーツ・マネジメント』（2006年）があり、雑誌ではニッセイ基礎研究所編『REPORT』（2003年1月号）での吉本光宏氏の玉稿などがある。いずれも本会関係者に知らせ、喜び合ったものだ。筆者も、日刊工業新聞2004年8月18日付け「経営士の提言」欄（過去42回寄稿）で「NPO法人における人と組織の課題　ミッションの浸透による意欲的取り組みを」の見出しで“アートNPO”“行政との連携型NPO”としての本会を全国発信し、大阪の読者などからの問い合わせもあった。ちなみに、同拙稿の結びは「有給職員は4人で、会ミッションに基づく仕事をこなし、相次ぐ全国各地からの見学者の応対にも当たっている。」としたが、今後とも、全国に通じるNPO法人の広報担当者として科学的、精力的に取り組みたく思っている。なおまた、本会入会動機に関連して「編集後記」で逆説的に記した“趣味としての歌舞伎鑑賞”について皆さんと大いに語り合う機会を持ちたいとも思う。

山下 博●やました ひろし
福井芸術・文化フォーラム理事。広報部会。
(社)日本経営士会近畿支部幹事。元・福井県大規模小売店舗審議会委員ほか。
読売新聞「論点」地方問題もの3部作と関連講演、など。

編集後記

◆事業をやってもやらなくても大変なら、やったほうがいいに決まっていることに気がついた5年でした。（K・M）

◆「プラットフォームとしての公立文化施設ないしアーツNPO」論議が活発だ。本会が取り組んできた、芸術家と市民をつなぐ機能、ムーブメント創出機能に加えて、芸術コミュニティ認知促進、芸術家の定住促進の両機能も含むという。引き続き、実践型調査研究に意欲的でありたい。（H・Y）

◆ふっか～と秋号をお届けします。
市民のみなさまの「文化フォーラム」。一層多くの方々のご参加と強い結び付きを願っております。
越前に寄席の太鼓や秋の風　（K・Y）

Program 福井芸術・文化フォーラム 2006年度後期　おもな事業のご案内

9月29日(金)～10月1日(日)
「まちは劇場」
会場：福井市中心市街地エリア一帯
全席自由◆1演目券1,000円／10演目通し券5,000円

10月22日(日)
東京スカパラダイスオーケストラ
TOKYO SKA PARADISE ORCHESTRA "WILD PEACE"
会場：福井市文化会館
18:00開演（17:30開場）
全席指定◆5,250円

11月3日(金・祝)
まちなかアートフェスタ2006
踊りに行くぜ!!vol.7　福井公演
会場：福井まちなか文化施設 響のホール
18:00開演（17:30開場）
全席自由◆2,000円

11月12日(日)
二兎社『書く女』
会場：福井市文化会館
19:00開演（18:30開場）
全席指定◆一般 S席5,500円／A席4,000円／学生(A席のみ)2,000円
◆フォーラムメイト S席5,000円／A席3,500円

12月9日(土)
阿佐ヶ谷スパイダース『イヌの日』
会場：福井市文化会館
19:00開演（18:30開場）
全席指定◆一般 S席4,500円／A席3,000円／学生(A席のみ)2,000円
◆フォーラムメイト S席4,000円／A席2,800円

2007年3月11日(日)
第5回芸文いこさ寄席
会場：福井市文化会館
全席指定◆一般 3,200円
◆フォーラムメイト 3,000円

2007年3月18日(日)
「みんなで舞台にたとう！」
会場：福井市文化会館
福井県内の養護学校や障がい児学級の児童・生徒を中心としたダンスと音楽の発表会
◎2006年11月～2007年3月にかけてワークショップを開催します。参加ご希望の方、詳しくはお問い合わせください。

※掲載の料金は、すべて税込です。
※当日券は、各500円増です。

入会のご案内

文化でふくいのまちづくり。一緒に活動しませんか？
あなたに合ったかかわり方があります。

[正会員(アートスタッフ)] あなたの思いや夢をカタチに
3通りのかかわり方
①会の運営を担う―部会や委員会に所属
②ひとつの事業の企画から実施まで―事業プロジェクトスタッフ
③気軽にちいさなお手伝い―ボランティアスタッフ

[準会員] 資金面での支援協力
・個人賛助会員　・法人賛助会員　・団体会員

[フォーラムメイト(鑑賞友の会)] もっと舞台を身近に、楽しく
・フォーラム主催公演(上記参照)のチケットを先行予約、優待割引
・公演・催しの案内、「ふっか～と」の送付

■会費＝年会費

正会員（アートスタッフ）	1口	5,000円
準会員　個人賛助会員	1口	5,000円
法人賛助会員	1口	10,000円
団体会員	1口	3,000円
フォーラムメイト（鑑賞友の会）		1,500円

すべてのお問い合わせは
福井芸術・文化フォーラム　電話 0776-23-6905
受付時間　月～金（祝日を除きます）10:00～18:00

福井芸術・文化フォーラムの活動を応援しています

セーレン株式会社

北陸労働金庫

次号2007春号は2007年4月1日発行です

発行　NPO法人 福井芸術・文化フォーラム
910-0019 福井市春山2-7-1 福井市文化会館内
tel.0776-23-6905 fax.0776-23-7905
http://www1.fctv.ne.jp/~geibun/